

「一頭の獣」

ヨハネの黙示録 13 : 1 - 10

June.14.2020

黙示録 13 : 1 - 10 (パワポ)

Preface

先週まで、ダニエル書 7 章に登場してくる大海から上がって来た 4 つの獣について見てきました。

一匹目の獣は、鷲の翼をつけていて、獅子のような姿をしていました。

二匹目の獣は、熊のような姿をしていました。

三匹目の獣は、豹のような獣をしていました。

そして、四匹目の獣は、現存するどの獣にも例えることの出来ない、ただただ“恐ろしく、不気味で、非常に強かった”十本の角を持つ獣でした。

そして、この獣すべてが、人間がつくり上げた帝国だったり、国々だったり、権力を持つ人間だったり、文明だったり、価値観だったり、人間模様だったりを表しており、そのすべてが、大なり小なり、いや大いに、人間性を壊し、世界を壊してきているということを見てきました。

また、ダニエル書 7 章に登場してくる獣とそっくりの獣がヨハネの黙示録 13 章に登場していると言及しましたが、その獣が、先ほど、読んだ聖書箇所が登場してくる獣です。

ダニエル書 7 章に出てくる四匹目の獣は、ローマ帝国とそれ以後の文明や国々などの人間模様を表していることを見ました。

そして、そのローマ帝国は、それまでの文明をすべて、淘汰し、踏襲し、吸収し、膨大で莫大な文明を築き、現代社会にまで、色濃く影響を与えていると申し上げましたが、

淘汰し、踏襲し、吸収した様子を、一匹の獣に投影して表しているのが、ヨハネの黙示録 13 章に登場してくる“一頭の獣”に思えてきます。

つまり、ダニエル書 7 章の“第四の獣”と、黙示録 13 章に出てくる“一頭の獣”が同一、または少しバージョンアップした姿に見えてきます。

Part One

黙示録 13 : 1 - 6 (パワポ)

ここに出てくる“一頭の獣”も、ダニエル書 7 章の獣たちと同じように、海から上がってきます。

そして、十本の角を持っており、神と神の民たちを冒瀆する大言壮語する口があり、全体的には豹に似ていて、足は熊の足で、口は獅子のようでありました。

この時点で、こうちょっと脳裏をかすめるイメージが、思い浮かんでいませんか？

そうです。

ダニエル7章に出て来た、一匹目の獣の獅子と、二匹目の獣の熊と、三匹目の獣の豹が、合体したような姿なんです。

その合体したような姿に、十本の角があり、神を冒瀆する大言壮語する口があり、さらには、七つの頭があり、十本の角に王冠がかぶさっていたというのです。

十本の角があり、大言壮語する口があったという共通点からして、ダニエル書7章の“第四の獣”と、黙示録13章の“一頭の獣”が同一または、相当するものであることを連想させます。

ダニエルは、ダニエル書7章の“第四の獣”を、“恐ろしくて、不気味で、非常に強かった”としか表現していないのですが、

鷲の翼をつけた獅子、3本の肋骨を口に加えた熊、四つの翼と四つの頭がある豹のような獣を見ただけでも、青ざめてしまうほどに気味悪かったのに、

四頭目の獣は、それにさらに拍車をかけて、全体的に豹で、足は熊の足で、口は獅子のようで、しかも、豹の顔に獅子の口を持つ七つの頭まである姿をしていて、それを見たダニエルは、“恐ろしくて、不気味で、非常に強かった”としか表現できなかつたのかもしれない。

つまり、ダニエルとヨハネが、幻のうちに、神様から見せられた見た獣は、同一のものだったと考えられます。

で、この獣の面白いところと言いましょうか、興味深いところが、全体的な見た目が豹で、足が熊で、口が獅子であるというその姿が、先週まで見てきた、

見せかけの繁栄を誇示している我々人間の帝国や、文明や、それを織りなす人間世界を映し出しているように見えるところなんです。

少し思い出すために、ダニエル書7章の初めの部分をもう一度見てみましょう。

Part Two

ダニエル7：2－8（パワポ）

ここに出てくる第四の獣に相当するローマ帝国の大きな特徴は、すさまじいほどの軍事力でしたが、その大帝国の動力部分、その精神世界や思想は、まことの神を無きものとみなすヘレニズム文化・古代ギリシャ文化でした。

つまり、ローマ帝国は、ギリシャ帝国の文化や精神性という服を着たわけです。さらには、その前のペルシア帝国の莫大な経済力と人口、バビロン帝国の攻撃性と征服力と支配力をも、吸収し、身に着けていました。

そして、ギリシャに相当するのが、四つの翼と四つの頭を持つ豹のような獣で、ペルシア帝国に相当するのが、3本の肋骨を口に加えた熊のような獣で、バビロン帝国に相当するのが、鷲の翼をつけた獅子のような獣です。

で、この三つを合体させると、黙示録の“一頭の獣”と同じような姿になり、ダニエル書の“第四の獣”になるわけです。

ローマ帝国が、ギリシャ、ペルシア、バビロンという帝国を淘汰し、踏襲し、吸収して繁栄した国だというならば、

ローマ帝国に相当する第四の獣は、見た目が豹で、足が熊で、口が獅子のようであって然るべきです。

そしてさらには、ローマ帝国のみならず、

取っ換え引っ換え、手を変え品を変え、あの手この手を尽くして、ローマ帝国以後の人が築き上げた国々や世界観や文明までも表すならば、生え変わることも出来る十本の角があって然るべきですし、

その見せかけの張りぼての栄光を誇り、誇示するためには、角に自ら王冠をかぶせる必要もありますし、

そしてこの獣を受け入れ、従い、順応していかなければ、排除という痛みと屈辱を味わうことになるという恐れを抱かせ、牛耳るためには、得体の知れない力があるように見える七つの頭があって然るべきです。

要するに、ダニエル書7章の“第四の獣”の正体が、黙示録13章の“一頭の獣”という形で、暴かれたというわけです。

二つの獣の見てくれに、多少の違いはあったとしても、そのやろうとしている内容は同じです。

人々をまことの神から引き離し、イエス・キリストによる救いから遠ざけ、神の言葉の権威を落とし、目に見えるものがすべてだと思いこませ、永遠の滅びへといざなっていく事です。

しかも、ダニエルの時代のずっと前から、ダニエルの時代の紀元前540年に至るまで、またその後のヨハネの黙示録の時代の西暦1世紀、そして21世紀の現代に至るまで活動し続け、さらには主イエス様が再臨されるその日まで、手を変え品を変え、この獣は、活動し続けています。

今でも、ひとりでも多くの人を主イエス様の救いから引き離すために、躍起に

なって活動しています。

だから、礼拝の場で、自分の正体を暴かれるようなメッセージがされることも、嫌で仕方がないんじゃないかなあ、なんて思ったりします。

もう一度、黙示録を見てみましょう。

Part Three

黙示録 13 : 1 - 6 (パワポ)

獣は、自ら死んだふりまでして、そこから復活したようにまで見せかけて、人々の心を掌握し、信奉し、拝むようにまでさせました。

サタンや悪魔には、オリジナルなものが何一つありません。

創造主であられる三位一体なる神様は、すべてにおいてオリジナルですが、サタンや悪魔は、それを模倣することしかできません。

だから、キリストの死と復活を見よう見まねで模倣し、死んだふりから生き返ったように見せかけて、人々を惑わし、その心を掌握します。

私たちの人間の文明社会は、戦争や飢饉や疫病や間違っただリーダーシップなど、大きな問題に直面するたびに、克服してきましたが、そこに神の恵みを認めようとはしてきませんでした。

もちろん、部分的に、またはクリスチャンたちの間では、神の恵みを認めてきた部分もあります。

しかし、人の営む歴史において、一貫して神の恵みを認めることは皆無でした。

ゆえに、ただの人間賛歌となり、さらに神を無きものとし、さらに神ではないものを崇めたてまつり、目標とし、指針として生き、結果的に獣を拝み、竜を拝むように仕向けられてきました。

ここに出てくる“竜”という存在は、創世記の人を誘惑した蛇に相当するサタンとか、悪魔の存在です。

サタンとか、悪魔は、竜というぞっとするようなすさまじいほどの恐ろしい姿で人前に登場することはあまりなく、往々にして、蛇のように気づいたらいつの間にか、ずっと近くにいるような登場の仕方をしますね。

この黙示録 13 章の記述は、

不確かなのに、目に見える、触ることが出来るという理由だけで、確かだと思いきまされている人間世界、人間模様の奥に潜む、

目には見えないけれども、確かな悪の根源の存在とその働きを、よく見せてくれています。

ナルニア国物語を書いた C.S.Lewis の「悪魔の手紙」という本がありますが、もし機会があれば、お読みになってもいいかもしれません。

悪魔の上司が、悪魔の部下に、どうすれば人を神から引き離し、キリストの救いに与らせないように出来るのかをアドバイスしているという設定で、書かれた手紙なんです。

ちょっとわかりにくいところもありますが、核心を突く面白い内容になっています。

Part Four

この黙示録の記録やダニエル書を含めて、聖書は、私たちに、世に幻想を抱かないようにと一貫して警告します。

なぜならば、ありとあらゆる媒体を用いて、ありとあらゆる情報と事象と現象で、世に幻想を抱かせ、人々の心を掌握する竜と獣の存在をはっきりと知っているからです。

私は、本を読むのが遅くてたくさん読めないのですが、本は好きなので、本屋さんに行くのですが、ものすごい数の書籍が溢れんばかりに並べられていますし、次から次と新刊が出てきます。

そして、そのすべての本たちは、特定の世界観を基盤にして書かれていますし、もしくは世界観そのものを伝えようとしています。

でも、「この洪水のように溢れ出てくる本を通して、多様な世界観を知って、まことの真理を探し出すことが出来るのかな？」

いや、みんなもしかしたら、真理が何なのか知りたくて仕方がなくて、追及するためにこんなにも止めどもなく、本が出てくるのかなあ。」なんて思ったりします。

また、「溢れ出る本のみならず、様々な媒体を通して発信される、ありとあらゆる情報は、私たちに、何かこう“確かな世界観”を提示するよりも、むしろ、さらに混乱に混乱を来たすようにしているのではないだろうか。」とも思います。

言うなれば、本や情報が溢れているということは、“真理である確かな世界観”を見失って、深く深く道に迷った時代の裏返しとも言えるかもしれません。

でもそれを認めるわけにはいかないですね。

「“真理である確かな世界観”を見失って、深く深く道に迷った時代である」ということを認めることは、自分を、人間を、人間社会を、築き上げてきた文明を否定することになってしまいますから、そうはいきません。

そして、出て来たとても都合の良い言葉が、“多様性”です。
誤解しないでください。

本来“多様性”という言葉は、神が造られし被造世界の最も大切な特徴を表す言葉であり、天然世界の調和、自然との共存、差別の撲滅、和解、関係回復、豊かさ等が伴う神の恵みを表現する言葉です。

だから、土浦めぐみ教会は、“多様性”という言葉をお大切にしてきました。

でも、“真理である確かな世界観”を見失って、深く深く道に迷った時代の風潮を美化して、何でもかんでもありとあらゆる世界観を受容し、受け入れて、何が何だかわからない世界になってしまっていることを“多様性”という言葉で装飾しているならば、本来持つ神の恵みとしての“多様性”という言葉の意味を全くもって見失っていることになります。

現代は、“まがい物の多様性”に生きることを、文化的だと思わせる世界なのかもしれません。

で、こんな世界観が乱立した多元主義的世界を生きている人類にとって、イエス・キリストこそ神であり、イエス・キリストにのみ救いがあるという“イエス・キリストの唯一性”は、

神の摂理もへったくれもない“まがい物の多様性”を誇る世の中からすれば、危険分子かもしれませんし、葛藤を起こす要素かもしれませんし、逆に排除を助長する障害物かもしれません。

大学の友達の結婚式の司式をした時、その披露宴の席で、隣で食事をしていた友人が、私にこんなことを言っていました。

「あのさあ、キリスト教って一神教で、包容力はないし、むしろ排除するような教えじゃない。日本の多神教の方が、よっぽど仲良くやっけて行けんだよ。」

本当にそうでしょうか？

まず、キリスト教は、一神教ではありません。

私たちが信じているのは、御父なる神、御子なるイエス、御霊なる神の三位一体の神様です。

これは、一神教でもなければ、三神教でもありません。唯一の三位一体です。

(三位一体については、またいつか詳しくお話ししたいと思います。)

そして、三位一体の神様は、愛です。

聖書に記録されているイエス・キリストは、危険分子や葛藤や排除ではなく、むしろ(その“唯一性”をもって)、“まがい物の多様性”に傷ついた人たちを抱擁し、癒し、慰め、回復させ、ご自分の命を捨ててまで、救ってくださいました。

何が本物で、何が模倣で、何が善なのかごちゃ混ぜになってわけがわからなくなっている“まがい物の多様性”の内に迷っている羊のような人間を、“まことの多様性”へと導いてくださったのがイエス様ですね。

黙示録 7 : 9 - 10 (パワポ)

天の御国で、子羊イエス・キリストに贖われた人たちの姿ですが、その群れは“すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆”からなっています。

彼らは、“まがい物の多様性”に埋もれて、息苦しくて、生きた心地がしないところから、神の恵みである真の多様性へと導かれ、その多様性を喜んでいる者たちです。

で、この子羊イエスを中心にした多様性は、人間だけの間でなされるものではなく、造られしすべての被造物でなされる多様性ですね。

まことの神を中心にした多様性をもって、神を褒めたたえている賛美があるので見てみましょう。

詩篇 148 : 1 - 14 (パワポ)

人を惑わし、世界を惑わす多様性ではなく、人も被造物も神も尊ばれる多様性がここにあります。

Part Five

“まがい物の多様性”という価値観の乱立、世界観が乱立した多元主義的世界を作り出して、人々を真理から、神から、救いから遠ざけておくということに関して、獣や竜は、人類の歴史の中で、一定、もしくは大いに成果を上げているのかもしれない。

ダニエル 7 : 21、25 (パワポ)

黙示録 13 : 7 - 8 (パワポ)

知らず知らずのうちに、獣を拝むように仕向けられている世界に私たちは生きています

でも、これには限りがあり、いつまでも続くものではありません。

聖書は、獣、竜、悪魔、サタン、そして、まことの神を無いものとみなす世界観と人、そのすべてが裁かれ、滅ぼされ、燃える火に投げ込まれる時が来るという約束を記しています。

だから、“救い”が必要なんです。

イエス様の救いは、この永遠の滅びからの“救い”です。

「年を経た方」、つまり、永遠の昔から永遠の未来でおられる父なる神と、
「人の子のような方」、つまり、主イエス・キリストのうちに、“まがい物の多様性”として現れている獣たちは、すべて、滅ぼし尽くされる時がきます。

そして、主イエスの十字架の血潮によって、この滅びから贖われ、救われ、白い衣を着、神の子とされた、いと高き方の聖徒たちは、滅びることのない永遠の御国を受け継ぐ時が、必ず、来ます。

だから、世に幻想を抱いていけないのです。

だから、

黙示録 13 : 9 - 10 (パワポ)

なんです。

Part Six

つい先日の金曜日、とてもつらくて、苦しくて、「ああ、死にてえ。」と、心底思っていました。「どうやって死のうか…」と、考えてました。

ヨナのように、「主よ、どうか、私を殺してください。」というのは、まだ全くもって、全然マシです。

これは、まだまだ、神様に対する訴えであり、むしろ、信仰的であり、信仰者としてある意味、見習うべき祈りの姿勢でもあります。

今まで幾度となく、「神様、どうか、僕を殺してください。 今晚、目をつぶったら、二度と目を覚まさないようにしてください。 もしそれがダメなら、事故にでも合わせてください。で、その支払われた保険金で、残された家族を養ってください。」なんていう信仰的な祈りは、何度もささげてきましたが、

今回の「ああ、死にてえ。」は、神も仏も知らん、もう何もかも知らん、嫌だという、信仰のない、不信仰な独りよがりの訴え、自己卑下、自己憐憫です。

今日見た聖書箇所風に表現するならば、“獣に戦いを挑まれ、打ち負け、踏みつけられ、噛み砕かれ、ぼろぼろになって、さらに、捕らわれの身にまでなって、獣まで拝みそうになった、いや実質、獣を拝んだ”状態です。

しかしこんな状態の中でも、聖霊の促す、かすかな期待と僅かな光を与えられました。

「ああ、聖書、読もう。」という思いです。
そして、読んだ聖書箇所が、コロサイ人への手紙です。

なぜ、コロサイ書なのか？
それは、キリストとは何者なのかということが、最も濃く、凝縮して、しかも分かりやすく書かれているからです。

キリストについて書かれている聖書箇所を呼んでダメなら、もうダメだという思いと、

キリストについて書かれている聖書を読んで、何とか、この深い深い闇を脱出したいという思いで、コロサイ書を選びました。

で、どうなったと思います。　　今、ここに立っています。

本当に聖書の御言葉は、食料です。

何よりもおいしく、何よりも喉を潤し、体中隅々まで、本当にこういう時に使う言葉なのかもしれません。

細胞一つ一つに行き渡るほどに、潤いと力と癒しと慰めと希望を与えてくれます。

コロサイ人への手紙 1 : 25 - 2 : 10 (パウロ)

教えられました。

何でこんなに苦闘しているのか？

“神の奥義であるキリスト”を知り、それを余すところなく伝えるためだということでした。

そして、このキリストのうちに、知恵と知識と、神の満ち満ちたご性質と、支配と権威の宝がすべて隠されていることを思い出させていただきました。

また、キリストに根差さず、建てず、教えられた通り信仰を堅くせず、あふれるばかりに感謝せず、この世のもろもろの霊や人の言い伝えによる、幼稚で空しいだましごとの哲学のような雑多な情報と世界観に身を任せ、心が捕らわれていることに気付かされました。

さらには、イエス様が、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」とおっしゃったにもかかわらず、神の言葉よりも、世の中で流れているニュースに触れている時間の方がはるかに長く、

「昼も夜も口ずさむ」のは、神の言葉ではなく、人間の言葉で、

神の言葉をもって世を見るのではなく、人間の言葉をもって神の言葉を量り、裁き、判断して、

キリストのうちにすべての宝があるなんて言っておきながら、やっぱり、宝は世の中に見出し、その宝を手に入れ蓄えるために、キリストを利用したいとは思いますが、

まことの宝であるキリストにあつて歩むために、世でこしらえた、様々な世の宝を用いることは勿体なくて出来ないという生き様をさらしていることを、否応なしに、開けっぴろげにされました。

もう泣くしかありません。

それでも、優しいイエス様は、泣いている私を赦して、受け入れ、喜んで、今一度、私のうちに力強く働くキリストの力を、与えてくださいました。

Conclusion

私たちの信じる神様は、裁く神です。

でも、裁くための裁きではありません。

また回復を与え、また再生を与えるための裁きです。

何度もでも回復を与え、何度もでも再生を与えてくださいます。

これこそ恵みですね。

この恵みがあるからこそ、私たちは、世々限りなく保たれる永遠の神の国を、相続として受け継ぐことが出来ます。

こんな特権、どこにも存在しません。

砂のようなこの地に根を下ろす人生ではなく、岩のような神の国に根を下ろす人生を生きるよう、導かれていること、これに勝る祝福もなく、感謝なこともありません。

最後に、使徒パウロ先生の祈りを見てください。

コロサイ人への手紙 1 : 9 - 10 (パウロ)

どうか私たちの人生が、あらゆる霊的な人生と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされ、

主のうちに歩み、主にある実を結び、神を知ることにおいて成長することを願ってやみません。

お祈りしましょう。

祝祷 : コロサイ 1 : 9b